■山鹿素行　　儒学者，兵学者。官学の朱子学を攻撃して播州に流され，赤穂義士，さらには維新の志士の精神的支柱に。
やまがそこう
元和大殉教・1622＝　　会津若松で，藩主蒲生家の重臣の家臣山鹿六右衛門貞以の子に生まれる。
徳川家光将軍1623＝ 1歳：

紫衣勅許無効1627＝ 5歳：蒲生家断絶のため，父が浪人となり，一家で江戸に移住，町医者となる。
_才気煥発で，この間に四書・五経・詩文等の書を読み覚え，

寛永禁書令・1630＝ 8歳：**_早くも，林羅山に入門。**
糸割符拡大・1631＝ **9歳：**
徳川秀忠没・1632＝10歳：松江城主堀尾忠暗より2百石で召し抱えたいと申し入れがあるが，父は禄が少なすぎると，断わる。

東照宮完成・1636＝14歳：**_小幡景憲，北条氏長について兵学を修め，**
島原の乱始・1637＝15歳：**_剣術の免許も受ける。稽古に励みながら，「大学」「論語」を講じ，**
島原の乱終・1638＝16歳：広田坦斎について国学や和歌を学び，「源氏物語」や「万葉集」の注解を執筆，
さらに，神道にまで関心を広げながら，
寛永飢饉始・1640**＝18歳：**
家光鎖国完成1641＝19歳：「大学中庸諺解」「大学論聞書」「論語諺解」「挨藁集」「孟子諺解」「私抄注解」など，**_次々，注解書を執筆，**
初の高札・・1642＝20歳：日野弥兵衛の娘浄智と結婚。「兵法神武雄備集」「略東鑑」成る。**＊小幡景憲から兵法の印可を受けて，兵学者として名を知られ，諸大名や家老から招かれて古典の講義をするようになる。**

以後，仕官せず，幕府に仕えることを願うが，浪人の家柄のため，達せず，また，**_ある大名の屋敷に招かれ，由比正雪と同席，その風貌見て大名に危険人物と忠言するも無視されたりするうち，**

市中諸法度・1648＝26歳：「修身受用抄」，
慶安御触書・1649**＝27歳：**
御蔭参流行・1650＝28歳：「牧民忠告諺解」。**_播磨国赤穂の浅野家の屋敷に招かれて縁ができ，**
徳川家光没・1651＝29歳：「式目家訓」「兵法奥儀集」。**_由比正雪の乱が起きると，その炯眼に評価が高まるとともに，**
承応事件・・1652＝30歳：**＊同じ浪人で兵学者の故，幕府の追究避けるべく，大名らから仕官を勧められ，赤穂浅野家に仕官。**
野郎歌舞伎始1653＝31歳：「海道日記」，
新利根川完成1654＝32歳：「東山道日記」，

・・・・・・1656＝34歳：「武教小学」「兵法或問」「手鏡要録」「孫子宴聾」「賤嶽並諸戦記」「日擾」，**_この頃には兵学は完成し，「武教本論」「武教全書」が主著となる。**
明暦の大火・1657＝35歳：「武教三等録」「兵法要鏡録」成る。
人身売買禁止1658**＝36歳：**
・・・・・・1660＝38歳：「陣中諸法度」「家訓条目」「雑記」「或問図説」「雑器火器」「古今戦略考」「織田豊臣家臣伝」「浅井聞書」「長久手戦記」「奥州記」「5万石人数積」「懐中便覧」成る。**_学問に専念すべく，浅野家を致仕。**
松平信綱没・1662＝40歳：**_「近思録」を読んで，儒学の主流朱子学に疑問をもつようになり，**

諸宗寺院法度1665＝43歳：**＊「聖教要録」を著して朱子学を批判した。門人らによる「山鹿語類」も成る。**
酒井忠清大老1666＝44歳：父が死去。**_「聖教要録」を幕府批判と受け止めた保科正之の命で，赤穂浅野家に預けられ，蟄居となるが，**
入鉄砲出女令1667**＝45歳：**
_旧知の浅野家の師として，学問環境が整えられ，
ｼｬｸｼｬｲﾝの乱 1669＝47歳：**_代表作「中朝事実」を著したほか，**

この間，「四書句読大全」「蟹話」「七書講義」「日本国図」「武家事紀」「武教余談」「翰墨訓蒙」「本朝古今戦略」「積徳堂書籍目録」「七書要証」**_「講居童間」「配所残筆」など，後世に残る書を次々執筆。**

談林派俳諧・1675＝53歳：**_赤穂浅野家預かりが解かれ，再び，江戸に出ると，門人らが結集，**
・・・・・・1676**＝54歳：**
素行の実母が死去した際には，大名や旗本までが弔問に訪れた。
_晩年には，著作よりも，山鹿流兵法の講義などを主とし，日本が聖人の道の行われた最もすぐれた国であるとする立場をとるようになり，
徳川綱吉将軍1680＝58歳：息子の山鹿万助に兵法を伝授，
天下一禁止・1681＝59歳：**_「中朝事実」刊行まもなく，**
その後も「治平旧事」「天馬賦」「平泰時小伝」「政事録」「合戦年月短歌」「雑録」「いろは事類」「伊呂波歌之人伝」などを著し，
堀田正俊暗殺1684＝62歳：
出世景清初演1685**＝63歳：_黄疸病に倒れ，没した。**

疋田啓佑「儒者」，中公シリーズ「日本の名著」，「この人どんな人」，「没年日本史人物事典」，「日本の群像」，平凡社百科事典，日本の古典名著，